

## 会長あいさつ

## IPPS-J 会長 鈴木 隆博



新年明けましておめでとうございます。皆様には良いお年をお迎えの事と存じます。また、会員の皆様におかれましては日頃からIPPS-Jの活動にご理解、ご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。

このたびIPPS-Jの新会長を仰せつかりました鈴木でございます。

私は、静岡県浜松市において、ハーブを生産、販売している生産者です。2004年にIPPSの国際理事会が浜松で開催され、そのお手伝いをさせていただいたことがきっかけで入会させていただきました。今までの同業者の会合では得られない植物に関する技術や情報を得ることが出来る素晴らしい会とっております。若輩者ではありますが、一生懸命に努めて参りますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

私は生産者であります近年植物を生産していて特に感じていることは、以前よりも夏の高温多湿化によって栽培が難しくなったり、病虫害被害が多くなり大変困っています。地球温暖化などで起こるとされる異常気象によって世界各地で災害が多発しています。米国や欧州では熱波が襲い、反対に記録的な寒波も観測されています。ここ数年は日本も台風や突風等によって大きな被害がでています。これらは温室効果ガスによる地球温暖化の影響と報告がされています。このような危機を少しでも削減するためには、植物を今以上に地上に増やして行くことが大切ではないでしょうか。さいわい国際植物増殖者会議には、国内、国外に植物に関する様々の分野で活躍されているメンバーが数多く会員に名を連ねています。植物には

二酸化炭素を吸収し酸素を放出するだけでなく、我々の暮らしを豊かにしたり、癒しを与えて

くれる素晴らしい価値があります。少し大きな話になってしまい恐縮しますが、植物、園芸に関わる私たちが危機感を持ち、知恵を出し合い、植物増殖が少しでもそのような諸問題に役立つことが出来れば、素晴らしい事だと思います。

昨年、10月に国際理事会が浜松で開催され7か国9支部の理事の方々が日本を訪れていただきました。ここ数年、日本支部も含め各国で会員の減少が懸念されていますが、このIPPSは日本国内だけではなく、世界に扉が開かれて国際交流ができる貴重な会です。IPPSの目的である『Seek&Share』探し求めて分かち合う、を理念とし、園芸関連産業に関する技術や情報を交換し、会員相互の友好を図ることにある、という素晴らしいモットーの原点に戻って積極的に活動に参加をして良き仲間に出会い、自らメリットを創り出して頂きたいと願っています。

今年はIPPSの日本支部が設立されて20周年を迎え、第20回記念大会が2013年10月に岐阜県大垣市で開催される予定です。設立当初のメンバーにも声かけをして一人でも多くのご参加をお願いし、今年も多くの参加者が互いの知識や経験を共有して情報交換、交流をしていただきたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

目次	国際植物増殖者会議2012国際視察ツアー概要(石井 克明)	2	MPS(花き産業総合認証)の取り組み(大西 隆)	5
	イキシアのご紹介(乗越 亮)	4	IPPS-J 第九期理事・監事・役員・理事代理名簿	8

# 国際植物増殖者会議2012 国際視察ツアー概要

森林総合研究所 石井 克明



昨年は国際理事会が浜松であり、その直前の10月20日より、国際ツアーを催行しましたので、ご報告致します。参加者は国際理事とその同伴者、各リージョンの会員およびオマーン植物園の2名です。前号でご紹介のあったニュージーランドの交換研修生のジュリエットさんの参加もあり、外国人25名と日本人2名（仁藤先生と小生）の総勢27名となりました。20日の夜は各国からの参加者の顔見せということで、初対面の方もあるので、アイスブレイキング・カクテル・パーティーを成田エクセルホテルで行いました。空港の夜景を遠目に見ながら、皆さん和やかに懇談されていました。

21日からはバスでいよいよ視察旅行の出発です【写真1】。まず近くの成田山新勝寺の散策です。関東でも屈指の規模のお寺の壮大さと、季節柄、菊の展示もあり、各自東洋らしさを堪能されていました【写真2】。次は、京成バラ園

へ向かい、まず全体の説明をバラ園の方より受け、各自自由に鑑賞しました。天気にも恵まれ、地元の高校のブラスバンドの音楽をバックに秋咲きのバラを愛でました【写真3,4】。近くでの和風カニ料理の昼食後【写真5】、一路高速道路で大宮の盆栽村へ向かいました。大宮盆栽美術館では、担当者より詳しい説明を受け、樹齢何百年といった盆栽に目を見張っておりました。大勢の外国人の見学は珍しいらしく、地元のNHKがテレビ取材に来ておりました。その後、蔓青園と清香園の2カ所の盆栽園と盆栽四季の家を巡りました【写真6】。その夜、大宮市内のバブに繰り出しましたが、店でアイルランドからの学生らしき人がギターを弾いており、参加者にとっては異国での思わぬ国際親善となりました。

22日は、午前中千葉大学柏キャンパスにある



【写真1】バスで出発



【写真2】新勝寺で



【写真3】京成バラ園正門にて



【写真4】京成バラ園でのGliff夫妻



【写真5】日本料理にチャレンジ



【写真6】盆栽園で

植物工場を見学しました。IPPS-Jの設立にも縁の深い、古在先生より直々にご案内して頂きました【写真7】。多くの企業も参加した、栽培試験施設を見て回り、トマトやレタス等が効率よく生産される様子を理解できました。その後、両国へバスで移動し、店内に実物の土俵のあるチャンコ料理店で昼食をとりました。皆さん、土俵の写真をとるなど結構好評でした。午後は東京スカイツリー、国技館、大江戸博物館を横目に浅草では浅草寺や仲見世の観光、東京タワーに移動し、東京の展望を楽しみました。宿泊の御殿場高原ホテルでは、各種地ビール飲み放題を堪能し、温泉で死海の浮遊体験を、英国のマクドナルドさんや、オーストラリアのラーキンさんと楽しみました。

23日は、生憎朝から雨と強風で、予定していた芦ノ湖観光船が欠航となり、急遽ポーラ美術館に行くことにしました。豪雨の間、膨大なコレクションを見て回りました。その後、箱根の関所や、柿田川公園で、富士山雪解け水起源の湧き水（わき間）を見学しました。午後は、ク

レマチスの栽培で有名な長泉町のクレマコーポレーションにお邪魔し、600品種以上のクレマチスが整然と管理され増殖されている様子を、渡邊社長より案内していただきました【写真8】。開花誘導の手法等、沢山の質問が参加者よりありました。また、事務所の2階で南米からの研修生もまじえての御家族ぐるみでの歓迎お茶会を設定して頂き皆さん感謝しておりました。雨も上がり、その日のホテルのある掛川までの途中の高速道路のサービスエリアで夕暮れの富士山をみる事ができました。

24日以降は、小生は都合で同行できませんでしたが、掛川花鳥園、鴨川園芸、鈴もと園芸、スズキ果物農園、浜松花きを、静岡県立農林大学校の速水先生の案内のもと視察し、シーク&シェアの有意義な見学会になりました。

今回のツアーは、多くの会員の方々のご協力が得られなんとか無事終了できました。特に青山様、速水様、水谷様、鈴木様、内田様、仁藤様、南出様どうもありがとうございました。



【写真7】古在先生より説明を受ける



【写真8】クレマコーポレーションにて

# イキシアのご紹介

東京農業大学 農学部農学科 乗越 亮



ご縁あって東京農業大学 農学部農学科 花卉園芸学研究室に勤務するようになり5年ほどが経ちました。母校への奉職は、卒業生である私にとりまして大変な荣誉である一方で、責任の重さを感じる場面も多く、緊張感ある毎日を過ごしております。13年前に世田谷から厚木へと移転した農学部のキャンパスは、市の中心部から程近い丘の上にあり、隣接する厚木ぼうさいの丘公園と一体化した「緑豊かな公園型キャンパス」です。本学OBの方には厚木中央農場の名称の方が親しみ深いかもしれませんが、現在では1学部3学科を擁する活気に満ちた学生たちの学び舎へと変貌を遂げております。

さてタイトルのイキシアですが、アヤメ科に属し、地下部に球根（球根類の分類上は球茎）を形成する、ケープ地方など南アフリカが原産の植物です。細い茎に多数の小さな花をつける姿は可憐で、蕾の段階では稲穂のような姿をしているのに対し、開花に伴い次第に華やかさが増し表情が大きく変化する魅力を持っています。日本では秋植え春咲きの球根植物として花壇などで楽しまれているほか、春には切り花としても出荷されています。花色は赤、オレンジ、黄、白、ピンク、紫、青緑など豊富で、芳香性を持つものもあり、利用場面の多い花材だと思います。

現在、このイキシア切り花の出荷期間を拡大することを目的として、促成栽培の研究に取り組んでいます。多くの春咲き球根類と同様に、球茎

に低温処理を行なってから栽培することで開花時期を早めることが可能で、大学院生・学部学生の協力により冬から春まで連続して品質の高い切り花を出荷できる栽培条件が明らかになってきました。同じく南アフリカの原産で、アヤメ科の秋植え春咲き球根類ではフリージアが大変有名です。既に普及している促成栽培技術によって、秋から春まで長い期間切り花が出荷され、その出荷量もイキシアの数十倍はあると思われます。姿・かたちなど切り花としての特性が異なるため、単純に当てはめることはできませんが、出荷期間の拡大がイキシア切り花の利用拡大の一助となり、より多くの方々に愛していただけるようになればと願っています。

最後になりましたが、本年よりIPPSに入会致しました。秋の静岡大会ではイキシアについての研究発表をさせていただくこともでき、会員皆さまの温かい歓迎には深く感謝しております。これまでは切り花の品質保持や、上述のような開花生理の研究をしておりましたが、今後は国際植物増殖者会議の会員として相応しいよう園芸植物の増殖についても研鑽を深めていきたいと考えています。



# MPS (花き産業総合認証) の取り組み

有限会社セントラルローズ 大西 隆



## ①はじめに

岐阜市の西隣に位置する本巣市は、昔から富有柿などの生産が盛んで、農業を中心に発展してきた地域である。この地域はその他に花の生産も多く、特にバラ苗の生産が盛んに行われている。また20年ほど前よりバラ鉢花の生産も始まり、現在では日本一の量を生産するまでに至っている。私も40年前よりバラの苗生産に始まり、現在では約2万平方メートルの温室で年間2百万鉢を生産する生産販売会社を運営している。

## ②MPSとの出会い

平成元年よりミニローズのポット栽培を開始した。全国でも初めての生産で、特に挿し木によるポット生産は過去に事例がなく、試行錯誤で手探り状態であった。年に何度も先進地のオランダ、デンマークに出向き、勉強に勉強を重ねる毎日であった。しかしその当時は珍しさもあって大変な需要があって、その要望に答えるべく工夫を重ねて生産に努力をしたのを覚えている。生産を始めた当時は固定ベンチで手灌水であったが、オランダのムービングベンチで自動灌水システムに魅力を感じ、1997年より導入し年々その面積を増やしポットローズを増産してきた。1999年にオランダに出向いた時MPS認証がオランダで始まったことをはじめて知った。花き生産認証プログラムと言われ、環境に配慮した生産である。オランダのアールスメー

ル市場では、オークションに生産者のMPS表示が電光掲示板に表示され、優先的に取引されていくのを見て、新しい花き生産とその動向に驚きを感じた。オランダを中心にヨーロッパの国々は自然環境に対する考えが充実しており、本当に自然を大切にする考えはすばらしいと思った。いずれ近い将来日本にもこのような制度が導入されるであろうと確信した。

## ③日本の花き産業に必要なもの

農産物に対する消費者の思いは、安心安全なものへの要求は年々高まり、環境への配慮の必要性、事業者責任の明確化、流通の透明性、トレサビリティと今までになくレベルは高いものとなってきている。農薬の規制強化、エネルギー消費の是正など、消費者は持続可能な社会と生活環境の改善を目に見える形で求めるようになってきている。日本の花き産業は需要の停滞に加え輸入切花の増加という問題を抱え、どのようにしたら消費者に魅力ある花を届けられるか、早急な対応に迫られている。今だからこそ環境に配慮した花生産の取り組みは大変重要であり、新たな付加価値につながり、消費者へのアピールを積極的に行い需要の拡大につなげたいものである。

#### ④セントラルローズの MPSの取り組み

2008年にMPS参加認証を全国で始めて取得し、現在もそれに取り組み生産を続けている。MPSの導入は生産、流通現場において、環境、品質管理など企業としての社会的責任に対応していることを示し、その導入メリットとして農薬やエネルギー使用量の削減、意識改革、コスト削減による経営改善などにつながり、また生産出荷物のMPS参加品目として、消費者にアピールすることによりブランド化の確立もあり優位な取引も可能になる。

弊社では養液循環方式を導入することにより、排水の外部への垂れ流しを禁じ用水路を少しでも汚さないようにしている。また温室内への害虫の侵入を防ぐため側窓には全てネットを張り巡らせ、また温室内にはファンを設置し絶えず空気を循環させて、より良い環境を作ることにより病害虫の発生を少しでも抑えて、農薬などの散布を少なくする工夫をしている。一昨年には重油高騰に伴いヒートポンプを導入し、電気を主に重油暖房機と併設し、まさにハイブリット運転である。CO<sub>2</sub>の発生も大きく削減でき、環境への負担を少なくしている。

梱包資材や使用済みのビニール、ダンボールなどの分別もこと細かく行うことにより、環境への配慮も怠りない。

農薬や肥料、電気量、重油の使用量などを4週間ごとにMPS事務局に報告し、その結果としてABC

のランクが示される。これは生産者自ら記録し報告したのを、第三者が評価しABCと認証を発行するものである。CやBの認定者は決して悪い生産者ではない。Aになるように努力、工夫することに意義がある。出荷物がBやCの人は安く販売されると言うものではない。やはり農業は自然と向き合っただけの仕事で、農薬やエネルギーを一時的に多く使用せねばならない時もある。使用しては決していけないものではないと私は思います。養液循環方式を導入していないとMPSに参加できないものでもありません。MPSに参加することに大変意義があるのです。

#### ⑤結び

MPSは生産者参加のABCだけではありません。花き市場関係者、花の加工業者、流通過程の管理業者などにも認証が与えられ、生産から流通販売まで一体となって取り組んでいることに大きな意義があり、最近花以外の野菜や果樹にも拡大され始めている。

今後MPSは環境保護と我々人間の健康を最優先し、人間と地球が共存できる持続可能な社会を追及していくことに貢献していくであろう。



温室風景



## 「美しさ」だけではなく、 環境にも配慮した新しい時代のお花の証明『MPS』

MPS(花き産業総合認証/オランダ語 Milieu Programma Sierteeltの略)とは、オランダ発祥の花き業界における認証システムのことです。花きの生産や流通上の環境負荷の低減や鮮度・品質の管理、社会的な責任に対する様々な取り組みを認証します。

MPS認証を日本国内で取得した場合、日本産または日本で取得したことを証明するため、MPSジャパンロゴマークが併用されます。



国際標準の認証規格



日本産花きの証明

## ■MPSとは

MPSとは、花きの生産業者と流通業者を対象とした、花き業界の総合的な認証システムです。花きの先進国オランダで環境負荷低減プログラムとしてスタートしました。2004年に花き流通業のISOと呼ばれる認証システムFlorimarkと合体、さらに、EurepGAPのベンチマーク認証となり、鮮度・品質保証、労働環境と認証の幅を広げています。現在、世界約30カ国、4500団体が認証を取得しています。MPSの最大の特徴は、花きの生産だけで完結せず、流通と一体となって業界全体での双方向的な取り組みが可能である点です。

MPSは、「花き生産業者の認証:MPS-Florimark Production」と「花き市場業者の認証:MPS-Florimark Auction」と「花き流通業者の認証:MPS-Florimark Trade」に分けられます。

農産物に対する消費者の要求は、環境に配慮した生産物の供給、事業者責任の明確化、流通経路の透明性、トレーサビリティ、とこれまで比べてますますレベルの高いものとなっています。これらの動きに対応して、第1次産業においても農薬取締法の改正による規制の強化、ポジティブリスト制度の導入などが次々に実施されています。消費者は持続可能な社会と生活環境の改善を目に見る形で求めるようになってきています。

これは花も例外ではありません。

また、「LOHAS」の流行に象徴されるように、消費者は持続可能な社会と生活環境の改善を目に見る形で求めるようになってきています。



一方、日本の花き産業は、需要の停滞に加えて、輸入切花の急増という難問を抱えています。どうしたら、消費者に魅力のあるお花をお届けできるか早急な取り組みが必要とされています。花はイメージ商品です。どんな商品よりも私たちの気持ちをニュートラルに、かつダイレクトに伝え、表現するアイテムです。1本の花でも、シチュエーションによって気持ちだけでなく、さらに自然や環境そのものも象徴しながら誰かの手元に届くのです。たった1本の花でも、それが表すものは私たちが考える以上にとっても大きいのです。

だからこそ、環境に配慮しているという取り組みはとても重要です。

### MPSジャパン株式会社

■設立 2006年8月1日

■所在地 〒102-0081

東京都千代田区四番町4-9 東越伯鷹ビル5F  
TEL. 03-3238-2702 FAX. 03-3238-2701

役職	氏名	担当	会社・所属	会社・所属住所
1 会長	鈴木 隆博		(株)浜松花き 代表取締役	静岡県浜松市
2 副会長	大橋 広明		愛媛大学農学部 生物資源学科 助教	愛媛県松山市
3 副会長	水谷 朱美		(株)ベルディ 代表取締役	愛知県豊橋市
4 事務・会計理事	南出 幹生		南出(株) 南出(株) 代表取締役	三重県鈴鹿市
5 編集理事	富田 正徳		(株)アイエイアイ エコファーム部	静岡県静岡市
6 国際理事	鉄村 琢哉		宮崎大学 農学部 教授	宮崎県宮崎市
7 理事	石井 克明	インターネット	森林総合研究所 森林バイオ研究センター センター長	茨城県日立市
8 理事	内田 恵介	IPPS活性化	グリーンクラフト 代表	三重県亀山市
9 理事	大西 隆	岐阜大会	(有)セントラルローズ 代表取締役	岐阜県本巣市
10 理事	藤森 忠雄	ニュースレター	(株)赤塚植物園 常務執行役員 社長室長	三重県津市
11 監事	遠藤 弘志	岐阜大会	揖斐川工業(株) アグリバイオ部 取締役アグリバイオ部長	岐阜県揖斐郡
12 国際理事代理	Peter F.Waugh		Carann Managing Director	Matangi 3260 NewZealand
13 国際交流推進委員	大森 直樹	IPPS活性化	(株)山陽農園 代表取締役	岡山県赤磐市
14 年史編纂委員	佐藤 伸吾		(有)花街道 石部西寺事務所 代表取締役	滋賀県湖南市
15 理事代理	青山 兼人		兼弥産業(株) 事業本部 取締役部長	愛知県知多郡
16 理事代理	速水 正弘		静岡県立農林大学校 教務課 主幹	静岡県磐田市
17 理事代理	小池 安比古	神奈川大会	東京農業大学 農学部 教授	神奈川県厚木市



静岡県立農林大学校の見学風景



Mr.&Mrs.Larkmanと藤森

**編集後記**

新年あけましておめでとうございます。2013年が皆様にとって、素晴らしい年になりますようにお祈りいたします。

さて、昨年10月には国際理事会の開催と同時に、IPPS-Jの第19回静岡大会が開催されました。企画運営をして頂きました、鈴木さん、速水さん、富田さん、静岡県立農林大学校の皆さんには重ねてお礼を申し上げます。また、国際の理事さん方を1週間にわたり、ご案内いただきました石井さんには厚くお礼を申し上げます。

この会は極めて小さな規模の会ですが、会員は若い人から年配者まで、又海外の人まで含まれますので、大変に国際色豊かでユニークな素晴らしい会です。この会の会員のメリットを探せば沢山の事柄を挙げる事が出来ます。特に植物の生産者にとっては宝の山です。また、英語を自由に話せる人

にとってはお付き合いの幅が世界に拡大しますし、楽しみも増えます。

その意味で今年は、会員増強のために、この会の特徴をもっと宣伝する努力をしなければいけません。そしてなんとか100名を超える会にしたいと考えています。なんとか会員増強のために、役員は勿論ですが会員さんお一人お一人もそれぞれの友人・知人にこの会を紹介して、入会をお勧めしましょう。

今年は民主党から自民・公明党の政権に変わりました。安倍首相は反省の上に立ち、日本の景気の回復を図り、何とか元気で強い国にするために頑張るはずですが。私達もIPPS-Jの更なる発展のために会員の増強を図りましょう。

次回には、ニュージーランドのジュリエット カーリーさんの原稿が掲載できることを期待しています。

ニュースレター担当：藤森忠雄